優秀賞

開いている扉を閉めてみよう

群馬県立沼田女子高等学校２年 高橋 志芽

コンクールのチラシを見た瞬間、ぱっと鮮明に思い出された授業がある。

私がその授業を受けたのは、今から3年ほど前、中学2年に進級した始業式の日である。放課後の話であるため、正真正銘の授業とは言えないのだが、その言わば課外授業のお話が今でも心に残っている。

その授業を受ける1ヶ月ほど前、見学で一目惚れをした剣道部に入部してから1年がたとうとしていた。当時の終業式で、剣道部顧問の先生の異動が発表された。強く、かっこよく、大好きだった先生に3年間教えてもらえると信じ、疑いもしていなかった私は、その知らせをすぐに受け入れることはできなかった。そして、今の顧問がいなくなってしまうのならば、当然新しい顧問が来る。私はまだ顔も名前も知らない新顧問に不信感でいっぱいだった。

嫌で嫌で仕方がなかったが、ついに始業式の日、新しい顧問との顔合わせがあった。

第一印象はこわかった。パンチパーマのようなヘアスタイルに、ガタイの良さも相まって、とても緊張したことを覚えている。本当に失礼だが、（なんか威圧感すごくない？稽古で怒鳴ったりするのかな。）と心配だった。

その顔合わせで、顧問と部員で輪になって初めてお話をした。先生は軽く自己紹介を済ませた後、私達に向かってこういった。

「開いている扉を閉めてみよう。」

私はどういう意味なのか、はじめはさっぱり分からなかった。

開けっ放しになっている扉を、自分がやったのでなくても気づいて閉める、そういった行動ができたら強い剣士になれるよ、という意味だった。また扉だけではなく、落ちているゴミや乱れているスリッパなど、身の回りにある、自分のせいでなくてもやったら人のためになること、そういったことに気づく人になってみようと言った。それまでは前顧問とのお別れの寂しさ故に、新顧問のことを知りもせずに不信感を抱いていた私は、自分が恥ずかしくなった。あのときの感情は言葉で表現するのは難しいが、とても腑に落ちて、大きく我が身に響いたような、とにかく私の人生に影響が与えられた感覚だった。そのときから、私は新顧問のことを尊敬している。

論理的に考えれば、開いている扉を締めたからと言って、落ちているゴミを拾ったからと言って、剣道がすぐに上達するわけではない。しかし、心と礼儀を重んじる剣道において、そういった心構えは何より大切であること、自分で気がついて自分で行動が取れる人は、稽古が辛くても、躓いてもきっと自分の心で乗り越えていけると教えてもらった。私は、先生の言葉を胸に、強い剣士になれるよう、周囲の様子をよく見て、進んで部室の戸締まりをしたり、電気がついていたら消すようになった。

聞いただけでは電気がついていたら消すなんてあたり前のことのように思える。しかし、少なくとも不器用でいっぱいい

っぱいだった当時の私にとっては、自分を律するトリガーのようになっていた。

不思議なもので、周囲を観察して行動しようとする、たったそれだけなのに毎日様々な場面で丁寧さが現れるようになった。落ちているゴミを拾って、剣道に少しはつながっただろうかと考えて、その心で剣道をし、少しずつ上達している感覚に喜んで他のことも頑張ってみようと思える。そんな最高のルーティンになっていた。これは、学校での通常授業では学ぶことのできなかった、特別な学習内容だ。

新顧問からは国語や数学などとは違う、「人間力」について教えてもらった。今でも、私はあのときの先生の言葉を忘れず、ゴミが落ちてたら拾う、トイレのスリッパが乱れていたら揃えるといったことを継続している。もう剣道は続けていないけれど、あのとき強い剣士になれるようにやっていたことを、今ではしっかりとした人間になれるよう続けている。

部活動は本当に大変だった。100本切り返しや打ち込みは今思い返しても「うっ」と思うが、人として必要な授業をたくさん受けられたと感じている。

今の私の夢は中学校の教員になることだ。自分の言葉で生徒を変えられる先生はとてもかっこよくて素晴らしい職業だ。それが悪い方向に言ってしまうことも残念ながらあるが、顧問のように良い方向へ生徒を導くことができるような、誠実さと意志を持った教員になりたい。